

地球研での事務職を経験してみえた地球環境学

辻村 はな子・熊澤 輝一・憂山 真紀・三原 一晃

■ 参加者紹介

憂山 真紀（かつやま まき）：現職は、国立大学法人京都大学学際融合教育研究推進センター・グローバル生存学大学院連携ユニット事務補佐員。2011(平成 23)年 2 月～ 2012(平成 24)年 3 月までの 1 年強の期間、総合地球環境学研究所管理部研究協力課研究推進戦略センター支援室研究推進係への派遣職員として勤務。文化人類学を専攻していた大学院時代にエジプト出身の主人と出会い、結婚。カイロでの子育ての経験を持つ。NPO やボランティア活動にも関心が深い。物腰やわらかに鋭い一言を放つ人物である。

熊澤 輝一（くまざわ てるかず）：現職は大学共同利用機関法人人間文化研究機構総合地球環境学研究所研究高度化支援センター助教。2011（平成 23）年 6 月採用。情報基盤部門にて総合地球環境学に知識工学の技術であるオントロジー工学を適用すべく研究を進めているつもりだが、もともとの専門が環境の計画づくりや協働のあり方を考えることだったためか、最近では、オントロジー工学の考え方を援用しながらワークショップの論点整理を行う機会が増えている。体験に基づいた人それぞれの環境や地域に対する見かたを、「見える化」するための方法論を考える日々。

辻村 はな子（つじむら はなこ）：現職は大学共同利用機関法人人間文化研究機構総合地球環境学研究所管理部財務課財務企画係。2011（平成 23）年 4 月採用。管理部研究協力課研究推進戦略センター支援室研究推進係として、三原とともに研究推進戦略センターのサポートにあたる。2014（平成 26）年 4 月から現職。学生時代に始めたスキューバダイビングで、お気に入りの海のサンゴが年々白化してゆく様を目の当たりにし、環境問題に興味を持つようになる。

三原 一晃（みはら かずあき）：現職は国立大学法人京都大学桂地区（工学研究科）事務部学術協力課産学連携係長。2010（平成 22）年 4 月～ 2013（平成 25）年 3 月までの 3 年間、総合地球環境学研究所管理部研究協力課研究推進戦略センター支援室研究推進係に出向。研究推進戦略センター（当時）の進める事業を、係長として事務的にサポートした。そのやわらかな物腰と丁寧な対応から、センター教員・職員双方からの信頼の厚い人物である。

■ 背景と目的

地球規模の気候変動をはじめ未来の不確実性を伴った問題による影響が顕在化する中、世界の人々はこれとどう付き合えばよいのか、という課題に直面している。地球環境問題は、もはや研究者のみがアンテナを張る種の問題ではなくなり、かつての公害問題がそうであったように、一般の人々にとっても「自分ごと」、つまり当事者として関わるだけのリアリティを持つフェーズに入っている。このような中、環境問題を扱う大学の研究科・学部、研究所は、どのような立ち位置で研究活動を行い、どのような役割を果たすべきなのだろうか。

地球研は今、トランスディシプリナリー、つまり社会や人びとのかかわりに重点を置きつつある。平成 26 年度「総合地球環境学の総合評価システム構築事業」による本企画「TD をお題とする座談会」もまさにそういった活動・研究の一環である。

トランスディシプリナリーを語る時欠かせないキーワードとなっているのが、「ステークホルダー（ときに日本語で「利害関係者」とも表現される）」である。では、地球研のステークホルダーと言ったときに、意外と見過ごされているのが、研究者以外の地球研「所員」の存在である。彼らは、地球研の研究者にとっ

て一番身近なステークホルダーなのではないだろうか。一番身近なステークホルダーである所員が、地球研あるいは地球環境学に対してどのように感じ、考えているのか。地球研の研究（あるいはさまざまな事業・活動）は、彼らに“何か”を与えることができているのだろうか。これらの問いが、今回のメンバーによる座談会を企画するに至った出発点である。

地球研がこれから真に「トランスディシプリナリーな研究所」として、社会や人びとのかかわりを実施するために、何をすべきなのか。地球研をよく知るステークホルダーとの対話を通して、明らかにしたい。

本報告は、地球研の研究職と事務職のスタッフによる共作である。トランスディシプリナリー・アプローチでは、Co-design（共に設計すること）、Co-production（共に作ること）が求められる。「トランスディシプリナリーな研究所」として地球研を発展させることを目標に業務に従事する事務職のスタッフと、環境学におけるトランスディシプリナリー・アプローチの方法論とはどのようなものかを考える研究職のスタッフ、同じ職場にしながら目標が異なる職種のスタッフによる協働の産物である本報告が、調和の取れたものになっているか、皆さんの目で確かめていただきたい。

■ 対話の記録

本章では、2時間に及んだ座談会の中から、憂山・三原両氏の背景や人柄を汲み取れる対話および「社会や人びとのかかわり」を考える上で重要と目されるキーワードが出てきた対話を抜粋した上で、対話ごとに小見出しを付与する。

地球環境問題と地球環境研究へのイメージ

辻村：聞きたいことっていうのを、だいたい3つ4つ絞って考えてみたんですけど、全体的に地球研の事務を経験された2人ということなので、地球研に来る前と、いた間と、出てからで何か変化があったりなかったり、いろいろあると思うので、その辺のことも含めながら聞いていきたいなあと考えています。まずちょっと聞いておきたいのが、地球環境に関する研究とか、そもそもの地球環境問題っていうものに、どんなイメージを持ってるのかなっていうのが、まず最初の質問です。時系列に答えていただいてもいいですし、今どう思ってるかっていうところから入っていただいてもいいんですけど、じゃあまずは三原さん。

三原：地球環境問題、研究についてのイメージっていうか、そのあたりとかですよね、そうですね、一応、今、京大の事務職で、地球研さんにいまして、また京大に戻ってということで、ただその地球研に来る前っていうのは、もうおそらく一般の人と同じような感じで、地球環境の研究というと、国環研とかああいうところのイメージ、理学系というか、オゾン層の破壊とか、環境ホルモンとか、そういうことしか、イメージというか、そういうことしか知らなかったんですね。地球研に来て、人間と自然の相互作用環でしたっけ、その辺のことを知って、そういう理学系というよりは、もあり、でも、そのこういういろいろな、人文科学系というか社会科学系というか、そういう研究もあって、あるんやなっていうことを知った次第ですね。出たあとについては、今現在ですけど、については、そうですね、やっぱりそう思うと環境問題というとほんとにある意味あらゆるものが環境問題のかなという言い方も極端だとは思んですけど、できるのかなというのは気はします。今、極端ですけど、戦争とかそういうところとかも環境問題でとしても捉えることもできるのかなとは思いました。とりあえず。

—中略—

辻村：憂山さん、どうですか。

憂山：私、地球研に来る前は、専業主婦してたので、あんまり学問のことは考えない生活をしてたので、環境問題とか環境学とかいう言葉もあんまりほとんど、考えたりも聞いたりもしなかったんですね。

でもちょうどここに帰って来るときに、エジプトで環境、いわゆる環境っていうのが問題だなと思って帰って来たので、それと縁があって地球環境学研究所に来て、そういういろんな今の環境問題について知ることができて、こういうことが問題なんだとか、こういう取り組みをしてるんだというのがすごく私にとっては興味深かったです。だから、地球環境学についてどう思うかっていう意見は特にはないんですけど、まあ、そうなんだっていったぐらいな感じです。

エジプトでの暮らしから環境問題を考える その1

熊澤：その環境問題って、たとえばどんな、そういうエジプトにいて、問題だなんて思っていたんですかね。

憂山：あっちでは、まず、はっきり言えば子供たちが学んだり遊んだりする環境が、物理的な環境がないということが一番私にはつらくて、つまり、外で遊ぶ場所、日本だったら道路でサッカーしたりするの普通ですけど、そういうこともできなかったんですね。公園に行くのも、わざわざ車で連れてってあげてみたい、そういう場所しかなくて、なんかこれってもうちょっと子供が学んだり遊んだりする場所を作るんじゃないかなと思って帰って来たので。それってやっぱり環境っていう問題なんじゃないかなと思うんですけど。だから、いろいろ勉強させていただきまして。

熊澤：それは危ないから、遠いから。

憂山：うん、あんまり、危ない。危ない。どこから言ったらいいのかわかんないんですけど、とりあえず、外はとりあえず女の人とか子供が1人で行くところじゃないっていうイメージがあって、その場所とか人のクラスとかにもよると思うんですけどね。車は車庫とかもないので、車がぶわあってみんな路上駐車してて、子供が歩くのも危ないみたい。あと、ごみ、ごみのポイ捨てひどい、とかね。まあまあまあ、はい、いろいろ。

辻村：ううん。いわゆる日本でよく話題になる環境問題ってなんかもっと何て言うのかな、もうちょっとおっきい視点の、今憂山さんが言ってくれたことは、すごい身近な環境の話で、でも、日本で環境問題で語られる場合とか、いわゆる環境問題、環境教育って、一般的にたぶん耳にされるのって、もうちょっと上の視点からの話が多いと思うんですけどね。そこのギャップみたいなものって、地球研に来て感じたりとか、何かあったですか。

憂山：でも、私はそれってつながってるんじゃないのかなあとか思ったので、結局、私は今ごみのポイ捨て、ひどいって言いましたけど、それ日本でもごみを減量しましょうというふうに言われてて、それってなんで減量しなきゃいけないかっていうと、CO2の排出量を減らしましょうって、そういうふうにつながっているんじゃないかなって思うのは思いました。

—中略—

憂山：カイロって田舎から人が20世紀になって田舎から人がぶわあって人が集まって来て、みんな田舎の感覚で生きてる人が多くて、田舎だと、たとえばごみって果物のヘタだったりとか、そんなんでポイって道に捨てても、ロバとかが食べるわけですよ。でも、このごろプラスチックが多くなって、それは田舎も一緒なんですけど、でも、みんな田舎と同じ感覚で道にプラスチックを捨てちゃったりすると、それが残ってたり。あとこれは笑い話として日本の人が言うんですけど、エジプト人の親子がタクシーの後ろに乗ってて、子供がピサを食べてたと。でも、お母さん、これもういらんって言ったら、お母さんは、じゃ窓から捨ててって言ったんです。

辻村：おおおう。

憂山：それが普通、普通の感覚。

辻村：なんですかね。

憂山：でも私はちょっと、うん、そういうことが積み重なって、子供たちが生きにくい環境が出来上がって

るような気がして。全然何をどういう質問して。

学際的捉え方—環境学は際（きわ）でできている

三原：学際も、日本語でいくと、学際の際、サイって、訓読みすると、キワ。

熊澤：ですよ。

三原：ですよ。ただ、キワっていうと、その端っこなのかなって。

熊澤：端っこ。

三原：端っこというか、キワなので、各分野があったら、その分野の端っこがこういうふうに円であったとして、こういうふうにつながってるような感じ。

(一同 笑う)

辻村：書いてください。

三原：こうあったとしましたら、ここがキワとして、それをこういうふうにか、キワをつなぐと円ができるのかなってというような、なんとなく、ここがじゃ、その環境学、とかっていうような。

辻村：なるほど。

三原：そんな感じとか、「〇〇」。

熊澤：京大の概算要求の書類かなんか。

辻村：使わせてもらってもいいですか。

(一同 笑う)

目標・射程によって研究内容も変わってくる

三原：地球研は、一応研究所っていうところでもあり、でもその解決のところでもありますよね。でも、その京都大学の学際センターは一応、解決を目標としてるわけではないということですか。

憂山：そこまでじゃないですね。教育プログラムなので。

三原：ただやっぱりその辺が、研究者個人というか、もしくは組織としてなのかもしれないですけど、でも、どこまでを目標としてるのか、どこを射程、どこまでを射程としてるのかによって、その研究内容も変わってくるのかなとは思うんですね。地球研はその辺、解決というところで、どう言うのかな、ううん、そうですね。ただでも、おそらくほんとに、日本で学際というか、そこまでやって

学際の際 イメージ図

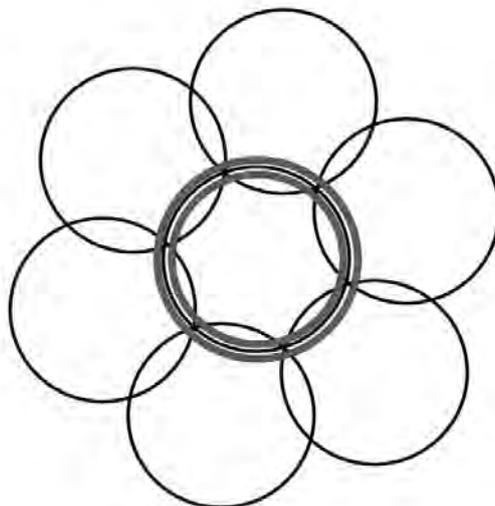


図1 学際の際でできた環境学

る研究所っていうのは、たぶんないと思うんですね、ほかには。それを思うとやっぱり、研究としてもたぶん成果が出ているのかな。もちろん私がその研究世界について語ることはできないんですけど、でも、もちろん成果も上がってると思いますし、ただ、その反面、その解決のところがどうなのかというと、(平成)22年度でしたっけ、文科省から依頼があって、各機関、各機関のその成果、社会とのつながりについての成果を、なんかまとめてもらえないかって話があったんですね。それでちょっと見ていたんですけども、一般的にアピールできるような成果っていうんで、実はというと、ちょっとこう、なかったというか、それが一応国内向けだったというのがあるんですけども、その辺で、成果としてももちろんあるんでしょうけども、ただその成果っていうのが、どのあたりの成果なのか、というのは、たとえば、政治家さんとかに、行政というか、そういったところに言って何かできるようなものなのかとか、ちょっと混乱してますけども。

熊澤：いや、その通りだと思いますけどね、政治家さん。

三原：でも地球研としては、たぶんそういうところにはコミットしないのかなっていうような節もあるんです。その辺もどうなのかなっていうところもあり、ただ、たとえば先ほどのほんとに純粋に理学分野であれば、たとえばこの発電ができればこういう解決に向かうっていうことが、簡単に言えると思うんです。でも地球研はたぶん、そういうところまではないのかなと思うので、はい。そのあたりが、ほんとに理系のそういう研究所とはちょっと違うところなのかなとは。簡単な答えが出ないところでは、成果が出ないところではありますよね。

辻村：そうですね。

成果をわかりやすく見せてほしい

憂山：今言ってはったんですけど、地球環境問題の解決ってなんかすごくでかいですよ。だからそれができてるのかって言われても、すごく漠然としてるので、おっしゃったように1つ目に見えるような、たとえば私が身近に感じれる、たとえばごみが少なくなるとか、そういうのがあればわかりやすくアピールできる、地球研が求めているのは、そういうものでもいいのか、目指してるというか、ところが、そういうところなのか。なんか、なんか、プロジェクトみんなに成果を1つずつ出してもらったらどうですか。1年に1回。

熊澤：厳しいな。

辻村：毎回何か書いてもらおう。今年の。

憂山：わかりやすいような。

辻村：成果これですっていうの、毎回1個ずつ出してもらうのプロジェクトの使命です、みたいな。

熊澤：年度切りなの？

辻村：年度切りで、なるべく年度切りで。

憂山：年度で。

三原：ほんとに研究成果、各プロジェクトがやってらっしゃることいろいろあったりとかするんですね。ただ、そういった、もちろん成果もいろいろ上がってると思うんですけども、その成果がたとえば、先生方は嫌がられるかもしれませんが、それがたとえばほんとに身近なわれわれにとって、成果というか、どう関係があるのかということも少しもおっしゃっていただくと、たとえば、一般の人向けには、わかりやすくなるのかなあというのは、気は。そうするとわかりやすいというか、その点そういうと市民セミナーとかは確かに、そういうところから作ってらっしゃるのかあとは思いますが。

熊澤：そうだね。

学会もできて、専任枠もできるといいですね

熊澤：いや、大丈夫、大丈夫。いや、実は、さっきの、僕も似たようなことを言おうとしたんだけど、その憂山さんの勤められてるセンターって、教育が目標でしょ。

憂山：はい。

熊澤：ある意味、大学の本質をついていて、すごい、しかも、ある意味、出口として、わかりやすいなつて。地球研は何か、名大で単位とか出したりしてるけど、そこが出口にできないっていうのが。

辻村：うん。

熊澤：何か、要するに、トランスディシプリナリー、インターディシプリナリーだけど、学際性を教えます、教えてそんな学生が育ちました、OK みたいな感じじゃないですか。

辻村：うんうんうん。

熊澤：ですよ。

憂山：OK、まあ育ったら。

辻村：育ったら OK。ふふふ。

憂山：でも、その学生たちが行くところっていうのもまた探さなきゃいけない。

熊澤：あ、そうですか。

憂山：ないんですね。だから、思ったけど、そういう人が地球研とかに行つて、「〇〇」。さっき言つてた問題は、だから、地球環境学っていうのが、すっごくでっかい学問になつて、学会とかもできて、何か専任に、1つのあれになつたらいいんですかね？ふふふ。

熊澤：それは、それが一応目標だからね。

辻村：目標、そう。

憂山：で、みんなが行きたいって思うようなところになつたらいいのかな。

(複数人 笑う)

憂山：あ、で、何か、ほかの大学とかも、地球研から人材欲しいみたいな。

辻村：うんうん。

憂山：なつたらいいんですかね。

辻村：そうですね。

熊澤：引っ張りだこみたいなね。

地球環境学は、結局のところ人間のことを論じている

三原：で、結局のところ、もちろん環境問題ですので、人間も自然で、自然の部分というのがあつてと思うんですけども、じゃあ人間の部分ていうと、結局のところは、そこなのかなと。人間の関わりである以上、人間の関係性というか、一人一人が持っている、仏教ではですけど、欲望というか、その辺、我というか、そういうところなのかなと。じゃあそれを解決するためにはどうすればいいのかなと、うん、というところというか、うん、ほんとにその、文化、人間ですかね。でも、人間でも、日本人のものの考え方と、各、いろんな地域、国によって人の考え方も違つて思うので、その辺をどう折り合いをつけていくのかなというところとかもありますし。ですので、環境学というのは、人間学でもあるのかな、というような。

熊澤：おおお。

辻村：ふんふん。

三原：いうような。

熊澤：環境学は人間学。

三原：昔、フォイエールバツハつていう人でしたっけ、が、何か。

熊澤：誰？

三原：フォイエルバッハという人が。

辻村：知ってますか。

三原：『キリスト教の本質』っていう本を書いた人でしたっけ、という人。

熊澤：知らないです。

辻村：ははは。

三原：という人が、神学について、神学というのは、結局は人間学であるっていうこと言ったそうなんです。

(*参考文献：富岡幸一郎(1999)『使徒的人間－カール・バルト』,講談社,331pp.)

辻村：神学って、神の学問の神学ですか。

三原：はい、書いて、その神のことを研究してるのに、ほんとはそれは人間のことを言ってるのではないかっていうようなことを言ってみたいなんです。それは、プロテスタントの自由、8世紀、9世紀ぐらゐの自由神学っていうのがあったらしいんですけども、それを文字って今言ったんですけど、それは何かって言うと、皮肉を込めて言ったらしいんですね。

熊澤：ふうん。

辻村：ふうん。

三原：でも、今の環境学っていうのは人間の部分を考えないと、たぶん解決は難しいだろうということが、地球研でよくわかった次第です、はい。

エジプトでの暮らしから環境問題を考える その2

三原：「○○」いいですか、先ほど生活環境というところで、エジプトで「○○」、たとえば、イメージでは、中東地域でも、今はちょっと大変なところがありますよね、イエメンとかああいうところとか。エジプトの比較的落ち着いているところですか。

憂山：ああ、でも、私がいたのは、アラブの春の前なので、たぶん今はいろいろあると思うんです。ただ、私の家族とか、別に普通に、子供は学校行ってますし。

三原：先ほど、所得とかによって、環境のことを考えるかどうかっていうところがあったかと話だったかと思うんですけど、環境のことを考えるのが、エジプトとかっていうのは、正直どうでしたか。生活水準とか、もしくは、その辺によって、環境のことを考える人がいたとか、いなかったとか。

憂山：私が思うに、カイロとかの第三世界の人、貧しすぎて、そこまではないか、別に私がお金持ちとかじゃなくて、客観的に見て、ほんとに環境問題まで考えがいかないと思います。だから、でも、なんで、私の私見ですけど、そういうふうな状況に置かれてるのは、先進国のせいじゃないかなと思うので、まあ何か、上からじゃなくて、ほんとに私たちが何かしてあげないといけないんじゃないかなあと。まあ、30年ぐらゐ遅れてるなあとあって、このままいけば、私たちみたいにもしかしたらなって、それでも、経済的にはお金持ってるけど、でもやっぱり環境問題があると、そういうふうに第三世界の人たちをしちゃ駄目なんじゃないか、何か新しいモデルを提示してあげないと。ふふふ。

基盤作り、選択肢が多ければ豊かなのか、経済学・教育学

三原：やっぱり不公平なのかなとは、さっきの質問、まあ、ここでこうやって穏やかに話ができますよね。

辻村：確かに。

三原：でも、今、そうでない人たちもたくさんいますし、環境問題なんて、そんなもの考えてる余裕なんかはあらへんわっていう人もたくさんいると思いますし。でも、環境問題というのは何ですかってことはあるとして、環境問題を考えるための、そういう基盤作りというか、その生活というか、そういうところをどうするのかということ、環境問題を考える研究所がすることではないかもし

れませんけども、でもそこも考えないといけないのかな。でもやっぱりそこも環境問題なのかなという、ううん、どうなんでしょうね。

熊澤：基盤について考え・・・。

三原：ないと、もしか、そこも念頭に置いて、環境問題を考えないといけないのかなというか、ううん。でもそうなると、環境問題なのかな。地球研が言う環境問題の範囲というか、定義というか、そこを。

熊澤：その基盤っていうのは、さっき言った、不公平とかそういう、社会的な・・・。

三原：ところも含めて、地球環境問題を考えられない人たちもいますよね。でもじゃあ、そういう人たちが地球環境問題を考えられるようにするにはどうすればいいのかっていう、でもそれはもちろん、地球環境問題だけではない問題ですので、その人が生活していくためにはどうすればいいのかとか、政治が安定するにはどうすればいいのかっていうところは環境問題とは関係ないところですし、でも、ううん、何か、全然違う話なんですけど、京大で、何か、和食について、そういう考える講座とかをやっている、出汁は文化であるっていうようなことを言ってやってらっしゃる先生がいるんですね。

憂山：私自身が思ってるだけなんですけど、じゃあ選択肢が多ければ豊かなのかっていうと、そうじゃないですよ。だから何て言うか、今、環境問題の会議とかでも、何か緑の経済とかいう言葉もあると思うんですよ。なんか私が個人的にすごく賛成するのは、もう経済成長しないでいいじゃないかと言ってる人たちがいるんですけど、私もそれでいいと思っていて、そういうふうに、お金があればいいとか、物があればいいっていう、そういう考え方をちょっと変えてあげると、先進国じゃない、途上国でも、別にお金をもうけようっていう方向に行ってるけど、それとはまた違う方向に行ったらいいんじゃないかなと思って、そういう、私がさっき、思ってる新しいモデルっていうのはそこなんです。

熊澤：ああ、なるほどね。

辻村：ああ、経済発展とはまた違う形で。

憂山：はい。

熊澤：経済発展とは違う形で。

辻村：どっちも新しい社会のあり方みたいな話ですよ。

憂山：何かこう、お金がなくても幸せだ。

熊澤：何か。

憂山：だって、お金とか経済成長とか、選択肢がいっぱいあってとか、そういうのって求めていたらきりがないし、そういう意味でやっぱ経済とか、文系のそういう教育学とか、そういうところから何か、環境問題に貢献してくれると、っていうか、必要なんじゃないかなと。

地球研にはリーダーシップを取って欲しい

辻村：ああ。そうか。ふふふ。どうしようかな。もしかしたら今までの話の繰り返しになるかもしれないですけど、期待できると思ってくださってるのなら、たとえばどんなところとか、地球研このままだったらまだまだ惜しいとか、駄目だとか思うところがあるんだしたら、それも「〇〇」ってところを聞かせてほしいなと思います。じゃ、憂山さんから。

憂山：ステークホルダーの話なんですけど、今、うちにいる先生方に、何か自分の学問を社会に適用するっていうか、役に立てるようなそういうことをしてくださいって言ったら、そうすると自分の研究の中立性がなくなるって言ってたんですよ。ということは、地球研はちょっと京大と違う研究機関。その立場的に、今のお話を聞いてると、研究をどんどん社会に還元していきたいっていう、何かそれが目標ってか、目的だとしたら、やっぱほかの研究機関と違う、そこが違うのかなあってちょっ

と今ふと思ったので、その中立性どうのっていうことも含めて、何かこう考えていってもらって、社会、地球環境問題について、何か解決に向かって努力していってもらいたらいいのかなって思います。はい。

辻村：三原さんはどうですか。

三原：僕はあの、そうですね、地球研に期待という、それはあの、そうですね。地球研にしかできないことをやってほしいということがあって、その話のあった通りで、環境問題とかにももちろん興味関心がある人がそのままずっと環境問題にちゃんと興味関心持ち続けてもらうということと、環境問題に興味のない人をいかにして環境問題とかにちゃんと興味関心を持ってもらうようにするのかっていうところに今まさに取り組んでいただければということと、それと、そうですね。あと、環境問題を解決するためのもの、そういった成果を上げていただければということと、あとそれと、たとえば京大で言うと地球環境学堂とかがあったり、最近、環境系のそういう、研究所もありますし、学部、研究科もあるんですけども、まあ同じことですけど、地球研でしかできないこととかいうか、もしくは、地球研がその代表になるようなぐらいで、なっていただければなあとは思っていますね。

辻村：何となく、期待していただけてるのかなと思いつつ聞いておりましたが。

三原：それはもう、もちろん。もちろん、はい。ええ、ぜひ、本当に、うん、地球研が本当に環境問題でイニシアチブを取ってもらえるように、やっぱりその今の、うん、その。そうですね。やっぱり今の日本にある環境関係の研究所とか、大学の学部、研究科っていうのが、やっぱり、うん、やや、先ほど、学問領域で言うと理学系に偏ってるのかなというところで、そういう本当に、人間文化も含めてというところでは地球研とか、IGES もそうかもしれませんけども、なかでもその辺で、うん、本当にリーダーシップを取ってほしいなあとは思っていますね。

普通の人から環境問題の意見を聞けるかは、研究者の姿勢次第

—中略—

熊澤：今の話で行くと、憂山さんっていう人がこれから地球研の研究について意見くださいだとか、一緒にそういうふうに言われたらどういう形で関われるのかなっていう質問ですかね。

辻村：うんうん、ああ、そうですね、うん。

憂山：関わりたいかと思うか、ということですか。

熊澤：まあまあ、思っていたくとして。

憂山：あ、思うとして。ああ。まあ、そうですね、地球研の研究者の方たちの姿勢によるかなあ。

熊澤：姿勢。姿勢、姿勢。何か一番厳しいところに来たな。

憂山：いや、何か普通の人でもやっぱ環境問題に関心のある人多いし、何か、意見を言いたいっていう人いっぱいいると思うんですけどね、意外に。

熊澤：そうか、そうか。

憂山：うん。だから、でも聞いてもらえないんだったら言わないだろうし。で、聞こうよって。私たちが聞きたいんだってそういうことですよ、地球研としては。

熊澤：いや、結構意外。いや、その言いたい人って、そんないるかな。

憂山：あ、いない。いないですか。

熊澤：わかんない、いや、でも憂山さんの周りにはいるわけだよ。

憂山：はい。

熊澤：どういう人の意見に対して、いるか、逆に私らが気づいてないし、そういう人とうまく関わられてない、そういう。

憂山：ああ、そうなのかもしれないですね、じゃあ。

熊澤：どんな人？

憂山：NPOの人とか。

熊澤：そうか、それはもう。

憂山：何か、ボランティアしてる人とか。

熊澤：ほう。

憂山：え、でもNPOの人とか呼んだんですよ。

辻村：何人か来てましたね、こないだのワークショップのときは。たぶん、幅広いNPOに声かけたとかそういうことじゃないと思うんですけど、誰かの先生の推薦とか、そういう感じだと思うんですけど。

憂山：私も、京大にいてすごく思うのは、やっぱりそこにも利害。さっきのお友達じゃないですけど、ふふ。わかんない。知らない。

辻村：うん、うん、うん。

熊澤：それは、笑っていいとものな。

辻村：ああ、あのね、テレフォンですか。

憂山：いや、うん。私の周りにはいます、とりあえず。

熊澤：ああ、でもそれはすごい何か、光が見えた感が。

憂山：だから、わかんないけど、地球研が本当にそうしたいんだっいたらいるんじゃないですかね。ただ、それが研究に役立つかどうかは知らないですよ。その市民の意見がどうなるかは知らないです。

—中略—

熊澤：でもまあ、さっき憂山さんがそっか、そういう意見を提供できる人がいるって、関われるような人って、結局興味持ってくれる人はいるというふうに言っていて。おそらく何か、そういう人たちだったら何か、やったほうがいいよねって。ま、単純に思う。分野的に環境ですか。そういう福祉とかそういう外国人の方とのお付き合いとか、そういう分野？

憂山：いや、普通にそこらにいるおじさんとかおばさんで、ちょっとごみを減らさなきゃいけないねとか思って、自分なりに工夫してるとか、私がイメージするのはそういう。

熊澤：ああ、ああ。

憂山：人ですけど。ちょっとバナナの皮は乾かしてから捨てるよとか。うん。え、でも、え、わかんない、それが地球研、その人がどうやって地球研と関わって、何かその地球研の利益になるのかわかんないですけど。

成果を広めることと問題を解決すること

憂山：その地球研が目指す環境問題の解決っていうのが、ちょっとおっき過ぎて私はちょっとよく見えなくて、辻村さんがおっしゃってたみたいに、熊澤先生もおっしゃってたみたいに、その普通の人たちの環境意識を高めるんだっていうのもあるし、あと本当に理学的とか工学的な意味で成果を上げるんだっていう解決もあると思うんですね。で、どっちを目指すのか。あるいは両方ともやるのか、ちょっとアプローチとかが違ってくるかもしれないと思うんですけど。

辻村：そうですね。

憂山：本当に研究的な意味でも解決できると思うんですけど、そういう成果はあまり普通の市民には関係なかったりしますね、それを広めるっていうこと、何か。

熊澤：広める。

三原：たとえば、NPOとかいろいろいらっしゃいますね、そういう環境問題とか、たとえば、まあ、ほんとただの思いつきなんですけど、たとえば地球研の成果でどういったものがあるって、環境のNPOと言っても、やってらっしゃることいろいろあると思うんですね。たとえば、地球研の成果でAとい

う NPO が取り組んでいる問題について地球研の成果でこういったところがあって、こういったこと、成果を前提として何かその NPO の活動に役に立つようなこと、あるいはそういう、うん。成果というか、もしくは考え方とかを提示するようなことができれば、たとえば関係が良くなったりとかするのかなっていう。

熊澤：いわゆるコンサルテーション。

三原：じゃないです。でもまあそれに近いようなところもあるのかな。難しいですが、それは、難しいですかね。

熊澤：いや、コンサルテーションで、あえてずっと、何か、民間的な言葉を使ったんだけど、そこまでいかないけど。

三原：まあまあ、何かそういった形で何か、コンサルって言うてしまうと本当に何か、うん、あのこう、勢いのようなイメージ。でも、そうではないですけども、その地球研がある、うん、成果とかが、最近、社会に還元とかってよく言われてますけども、それでももう少し具体的な形で、たとえば、そういった方々に使っていただくことができるのかなと、できればいいのかなというような気もするんですけど。でもそれは、ああ、でも難しいですね。そうすると関わり方がちょっと難しくなってしまうし、危険かもしれないですね、それは。

ステークホルダーと問題意識の優先順位

熊澤：うん、でも、さっき、さっきの話、辻村さんの話に戻ると、要するにそういうことを何か嫌だなと思ったり、気を配れる人と、気を配れる人は優先順位、圏内に入ってる人と、圏外の人と。その圏内の人とうまくコラボする。圏外の人に、いかに圏内に入ってもらっていうところは、なんかやるべきことなのかなって気は今日、まとめにかかっているけど、そういうことかなあって、すごいつながっているような気がする。したけど、ね。

辻村：そうですね。今まで気づいてなかったっていうことを今、熊澤先生の言葉で気づいたんですけど、基本的に地球研がステークホルダーって呼んでイメージしてる人ってその圏内の人たち。

熊澤：まあ、圏内で。

辻村：で、たぶんそうする意図なくとも、協力してくれる人って基本的に圏内の人になっちゃいますよね。たぶんそれだけで満足してちゃいけないだろうなって、圏外の人たちを巻き込むところまで頑張って持って行けたらいいんだなって、今、気がつきました。ふふふふ。

熊澤：そこは何かすごい、うん。圏内の人を巻き込むか、そうそう、圏外の人を巻き込むか、圏外の方は圏外の人として別枠でどう扱うか、そういう、いろいろ考え方はあるみたい。

辻村：何か1つ、戦略をそこで地球研持ってもいいのかもしれない、ですね。だからいきなり圏外のこと考えると難しいとこいっぱいあると思うんで、まずは圏内の人たちと頑張っって、「○○」を何かこう、何てんだ、ステップを考えるというか、そういう発想も必要だなと。ついつい圏外のことを忘れてしまいそうな気がするの。

熊澤：ううん。ステップね。うん。

憂山：たぶん、ステークホルダーっていう時点でたぶん圏内だとするんですよね。

■ 考察

本章ではまず、対話のまとめとして重要なキーワードを整理し、次にそのキーワードを軸として「トランスディシプリナリーな研究所」として地球研に必要なことについて、対話から導き出していく。

「学術的（に評価される）成果」とは、学術論文等によって発表され、評価の対象となり、学術の発展に寄与する「成果」である。たとえば「理学的な工学的な意味で」「研究的な意味でも解決できると思うんですけど、そういう成果はあまり普通の市民には関係なかったりしますね」（憂山）という発言に現れる「成果」である。

一方で「社会的（に有益な）成果」とは、社会や人びとの活動や仕組みのなかで積極的に採用・活用される「成果」である。「社会とのつながりについての成果」「たとえば政治家さんとかに、行政というか、そういったところに言って何かできるようなものか」（三原）という発言に現れる「成果」である。

このように整理すると、「トランスディシプリナリー（社会や人びとのかかわり）」を考えるうえでは、特に「社会的（に有益な）成果」が重要な位置を占めることがわかる。

成果を「出す」とはどういうことか：対話において、「成果」とともに使用される動詞は「出す」であることが多かった。さらに、「研究としてもたぶん成果が出ている」（三原）や「プロジェクトみんなに成果を1つずつ出してもらったらどうですか。1年に1回」（憂山）など、「成果を出す」という発言は2つの意味で使われており、これらは区別して考えなければならない。つまり、成果を「上げる」ということと、成果を「伝える」ということである。

特に、今回の対話では、成果を「伝える」ことについて、前述の「プロジェクトは年に1度成果をひとつずつ」という憂山の発言や「NPOが取り組んでいる問題について地球研の成果でこういったところがあって、（その）成果を前提として何かそのNPOの活動に役立つ」（三原）といった具体的な提案がなされた。

一方で、成果を「上げる」ということは言い換えれば「結果を出す」ということである。これについて対話では、「環境問題を解決するためのもの、そういった成果を上げて」（三原）、「理学的なとか工学的な意味で成果を上げるんだっていう解決もある」（憂山）のように、上げた成果をどう問題解決に役立てるかという文脈の中で発言されている。

ここまでの整理を踏まえると、「学術的（に評価される）成果」と「社会的（に有益な）成果」は、「上げる」「伝える」という面から次のような関係にあるといえる。

「学術的（に評価される）成果」が「上がったとき、それらは出版・講演等によって社会や人びとへ「伝え」られる。その「成果」が、社会や人びとの活動や仕組みにおいて採用・活用されるとそれが「社会的（に有益な）成果」となる。もちろん、研究により「上がった成果のなかには、「学術的（に評価される）成果」が社会や人びとに「伝え」られるという過程を経ずに、直接「社会的（に有益な）成果」となるものもあるだろう。その場合も、その成果が社会にひろく「伝え」られ、役立てられることがなければ「社会的（に有益な）成果」とはいえない。

つまり、研究所として「成果」を「伝える」ことは「社会や人びとのかかわり」においては特に重要である。そのようにして「伝わった「成果」を「社会が受け入れた」こともまた、地球研の「上げ」た「社会的（に有益な）成果」であると評価できるのではないだろうか。

「新しいモデルの提示」

「新しいモデルの提示」とは：対話の中で、地球環境問題に関連する具体的な問いかけとして「選択肢が多ければ豊かなのか」「第三世界は貧しすぎてそこ（≡環境問題を考える）までいかない」（憂山）や、「日々の生活をどうするのか」（三原）などがあつた。そして、これらの問いに答えるために必要なことは「新しいモデルの提示」であるという提案がなされた。

この提案は、憂山が発言しているように、「先進国が経済的な豊かさは手に入れた一方で、環境問題という新たな課題に直面しているという現実」と、「途上国と同じ轍を踏ませているのか、そうじゃない方法もあるのではないか」という疑問から生まれた「先進国がなにかしなければならぬことのひとつ」である。つまり、「新しいモデルの提示」は、環境問題をテーマに掲げる先進国の研究所が果たすべき役割である。

地球研においてもこれまで、いくつもの新しいモデルが提示されてきた。それでもなお、今回「新しいモデルの提示」の重要性が指摘されたのは、なぜだろうか。それは、そもそも先進国の側でモデルの転換が行われていないことによる。これでは、エジプトのような国々が参照することができない。新しいモデルを提示して実装し、定着する過程を経ることで初めて、「新しいモデルは提示された」と社会から認識されることになるからである。

では、ここで語られた「新しいモデル」は、今回の視点である「社会や人びとのかかわり」の視点から構想していくと、具体的にはどのようなモデルになるのだろうか。以下では、この点について議論を深めていく。

「提示」のその先にあるもの：経済発展モデルとは一線を画した新たな社会のあり方を問う研究を経て提示された「新しいモデル」は、どのように「社会や人びとのかかわり」ことになるのだろうか。この「かかわり」の部分に対して、「たとえば政治家さんとかに、行政というか、そういったところに言って何かできるようなものなのか」（三原）や「経済とか、文系のそういう教育学とか、そういうところから何か、環境問題に貢献してくれると、っていうか、必要なんじゃないかな」（憂山）といった発言にも表れているように、政治・経済・教育の重要性が指摘されている。

また、ここまで考察してきたように、提示されたモデルは、社会において活用されることによって、「社会や人びとのかかわり」をもつことになる。そして、そのモデルが活用され、その結果が検証されることによって、それ自体が新たな研究となり、その結果としてバージョンアップした「新しいモデル」が提示される。この流れが生み出され、実践されるためには、社会や人びとがそのモデルを採用したいと考え、実際に採用を決定するというプロセスが不可欠である。このプロセスには政治・経済・教育が大きくかかわっており、これらを学術的に扱うのは、政治学・経済学・教育学といった社会科学である。このプロセスにおける関係を中心に、社会科学との連携が今後「社会や人びとのかかわり」を実践するうえで重要となるだろう。人文科学、自然科学と社会との間を媒介するものとして、社会科学の存在を明確に意識し、活用していくことの重要性が指摘されたといえよう。

学際性の確保によるリーダーシップ

ここまで、「成果」と「新しいモデルの提示」について考察してきたが、これらを広範にまた効果的に実践するためには、地球研自身の積極的なリーダーシップが必要である。対話では、三原が環境系の研究所、研究科などを挙げつつ、「地球研でしかできないことというか、もしくは、地球研がその代表になるようなぐらいで、なっただけならばなあとは思いますがね。」と述べているように、学術の立場から「地球研が本当に環境問題でイニシアチブを」（三原）取ることを求めている。

具体的には、どのようなリーダーシップの取り方があるのだろうか。たとえば「社会や人びとのかかわり」による先導的研究を実践したり、その手法や成果の共有・発展の場として「地球環境学会」を主宰したりといったことは、研究におけるリーダーシップの形といえよう。

リーダーシップは研究活動にとどまるべきではない。たとえば、憂山は、社会や人びとのなかには「関心のある人が多いし、意見を言いたい人はいっぱいいる」と語る。そんな彼らに対していかにアプローチし、「成果」を伝え、「モデル」の活用・検証に参加してもらえる関係を構築するか。ここで求められるのは、研究者が社会の人々に働きかけるにあたってのリーダーシップである。そのための具体的なアプローチの方法の一つとして、成果の伝えかたで提案された年に1度の成果発表は有効な手段となり得る。

ところで、このリーダーシップへの期待は、どのようなアイデアに支えられているのだろうか。リーダーシップについて言及した三原の発言を振り返ってみよう。まず、研究所が考えるべきこととして、「環境問題を考えるための基盤作り」があることを語った後、「そこ（基盤作り）も念頭に置いて、環境問題を考えないといけないのかなというか、うん。でもそうすると、環境問題なのかな。地球研が言う環境問題の範

囲というか、定義というか、そこを。」と述べている。このように語る三原は、環境学を前章の図1に示した分野間の際（きわ）で構成されたもの、すなわち学際性の産物であると認識している。したがって、対話の中で示されたリーダーシップは、学際性の確保あって実を成すものと整理できるだろう。

TDを議論する際は、学際と「TD（社会や人々とのかかわり）」を別個に議論するのではなく、「学際性は超学際へ誘う」という観点に立つことが重要であり、地球研が環境問題について学術の立場からリーダーシップを取るための要件であることが、今回の対話を通して示された。

まとめ

私たちの座談会における「トランスディシプリナリー（社会や人びととのかかわり）」は、「研究の計画あるいは実施過程における地球研（研究者）と社会や人びとのかかわり」ではなく、「研究の結果出てくる“もの”をどのように社会や人びとに届け、役立てるか」という点が主題となった。その象徴的なキーワードとして「成果」と「新しいモデルの提示」、「学際性の確保によるリーダーシップ」が対話の中から導かれ、その3点を中心に考察してきた。この「成果」と「新しいモデルの提示」は図3のような関係にある。

地球研は第3期中期目標・中期計画期間（平成28年度～平成33年度）にむけて、ますます「社会や人びとのかかわり」に重点をおいて、研究や活動を進めることは必至である。そのなかで、図中の斜線部分が今後の地球研に求められる「成果」であることが、ここまでの考察によって明らかとなった。これを実現させることができれば、ステークホルダーとの協働を実践する「トランスディシプリナリーな研究所」として、さらに飛躍することができるのではないだろうか。

最後に、ステークホルダーについて、重要な指摘があったのでここで取り上げておきたい。それは、地球研がステークホルダーと呼んで想定している人びとは、「地球環境問題に興味・関心のある人びと」ではないかということである。対話の最後で、人びとの関心の有無は、地球環境問題が人びとの優先順位として高い位置にあり問題意識の「圏内」、あるいは「圏外」という言葉で表現されている。地球環境に関する問題意識を「圏外」から「圏内」に引き上げる。これも、「トランスディシプリナリーな研究所」である地

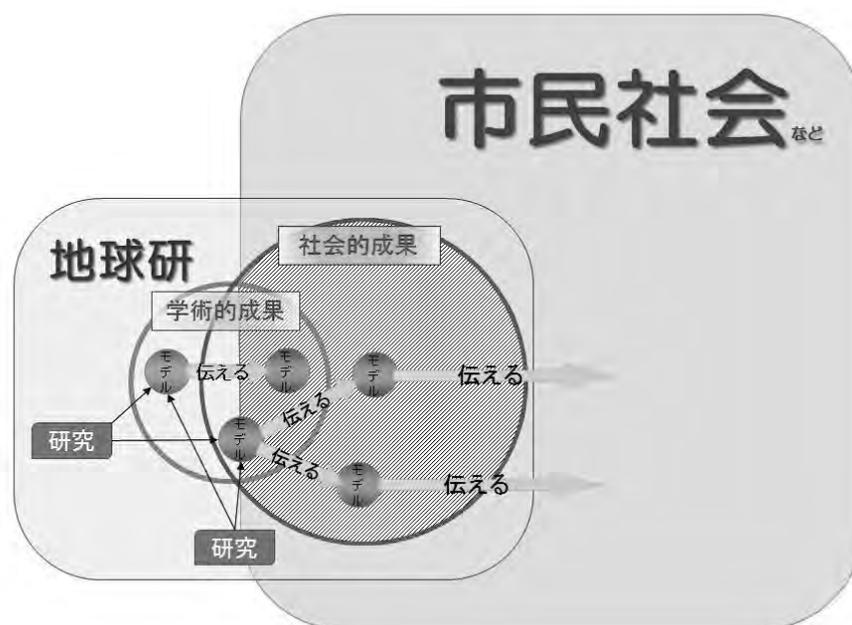


図3 成果とモデルの関係

球研の重要な役割なのかもしれない。

■ 謝辞

神戸大学・経済経営研究所附属企業資料総合センター助教（当時）の辻村優英氏には、環境問題を議論する上での所得や資源配分の視点をもつことの大事さ、「経済成長を続けなければならないという規範的な命題自体を、私たちはなぜ真だと思ふのか」という研究の視点など、宗教学と経済学の融合的見地からアイデアをご提供いただきました。ここに感謝の意を表します。